

幼馴染の暗殺を
止めたい



添牙いろは
イラスト..ましろ.あー。

ここはどこなのか。ただ、真っ暗なところで揺れていて、
上も下も、右も左もわからない……が、光を感じる。

それがどこから射しているかさえわからないのだけど。

為す術もないまま、俺はそこへと流されていくことしかできない。
何かの終わりと、何かの始まりをぼんやりと感じながら。

幼馴染の暗殺を止めたい

添牙いろは

ん、ああ……変な夢を見ていた気がする。が……ここはどこだ？ 絨毯敷きの床に、大きな本棚がひとつ。そのラインナップはラノベと漫画を中心に、偏りの中で幅広い。そして、ベッドに勉強机。卓上にはパソコンが乗っているようだ。天井には輪になった灯り。生活感あふれるよくある感じの個室のようだ。

そんなところで、俺は……何故床で寝ている？ 転げ落ちたにしては毛布を巻き込んでもいない。窓の外から光が差し込むことはないが、車が走り去っていく音は聞こえる。まだ完全に街が寝静まるような深夜ではなさそうだ。そんな中途半端な時間に目を覚ますとは……二度寝できるような気分でもない。

というか、ここは一体どこなんだ？ 見覚えがあるような気もするのだが……どうにも思い出せない。そのままぼんやりと記憶の糸を辿っていると――

スパッ。

引き戸で良かった。押し開かれていたら頭に扉板をぶつけられていただろう。誰が入ってきたのかと上目に覗き見てみたが、その瞬間――！

「!!？」

さすがにこれは寝ていられないだろ！ いや、いや……これは……待て、その……ナニイイイイ!?

「……フン、貴方如きでも一丁前に照れたりするのね」

女にはまったく動じる素振りはなく、壁と向き合う俺の背後を平然と通り過ぎていく。せめてもの抵抗として今更ながら懸命に目を閉じてみるものの、どうしても先程の鮮烈な光景が焼き付いて離れない。

濡れてしつとりと頬に張り付いた短い髪。

邪魔そうに見下ろす冷ややかな双眸。

天井への視界を遮ることのない薄っすらとしたふたつの膨らみ。

こんもりと絡み合い、少し尖った黒い毛先と——！

「いやっ、これは、その……ッ！」

得も言われぬ罪悪感に押されて言い訳やら謝罪やらが頭の中を駆け巡るが、本当に俺が悪いのか？ 指一本動かすことなく、開けた視界がソレによって埋め尽くされていたのである。もはやこれは事故ではなからうか。

そのうえ、彼女自身も気にしていない。

「ナニ今さら意識してんだか。……キモっ。小学生まで一緒にお風呂入ってたじゃない」

あ、ああ……そう言われると……ウン。むしろ、こうして緊張する方が失礼にあたるような気がしてくる。

「まあ……それは、そうなんだが……」

言われて、何とか自分なりに納得してみようとすると……うう……つ、やっぱそう簡単に割り切れるもんじゃない。いくら、ラノベの主人公にありがちなラッキースケベだとしても！

だが、女子に割り切られてしまつては、男として余計に気不味くなってくる。あちらさんは堂々とパンツを穿き、タンクトップをかぶり……つて、それで終わりかよ。いや、もう少し肌を隠して欲しいんだが。それなのに、隠すべきところが隠れてくれたことで、ホっとしている自分が不甲斐ない。

何とも居た堪れなくまごつく俺に、椅子に座つて彼女は一言。

「起きたのならご飯くらい作りなさいよ。下宿させてやつてんだから」

「い、いや、いきなり作れと言われても」

何をどうしたものかサツパリだ。まごつく俺に、下着同然の女はまったく引かない。

「それとも、このシロカに台所へ立てと？ 居候のクセに随分大きく出たわね、タツマ」

「はあ……わかったよ」

ともかく部屋を出てみると……すぐ正面には開きっぱなしになった扉。その奥から湯気の香りを感じるので、おそらく浴室なのだろう。左方向へ続く廊下の先にはすぐ

玄関。右側がダイニングとキッチンか。

しかし……うーん……古めかしいシンクには、洗い残した食器が積み重なっている。調理の前に、そっちを片付けた方が良くないか？ 一歩目からゲンナリしている俺の背中を、シロカは後ろからグイと押す。

「何？ 献立を決めかねてるなら、そのくらい私が考えてあげるわ」

邪魔そうに後ろから小突かれながら、俺は台所へとやってきた。

「なあ……エプロンとかした方がいいんじゃないか？」

俺が着ている臙脂色のジャージの上下は、とてもじゃないがこれから料理をする服装とは思えない。そもそも、手首も足首も出すぎだろ。これ、サイズ合っていないな。

「気にしなくていいわ、そんなこと」

シロカは屈み込んで、小さな冷蔵庫を覗き込んでいる。その様子は……色っぽいというより、だらしのないOLといった風情か。ビールなんかが出てきてもおかしくない雰囲気ではあったものの、ドアポケットに並んでいるのは酒類ではなく栄養ドリンク。これはある意味、OL以上の殺伐感だ。

「お肉とお野菜があるから……中華風にどうにかしなさい。ご飯だけは炊いてあるから」

「どうにか、って……」

冷蔵庫の中にはメインとなる食材だけでなく、調味料なんかも陳列されている。オイスターやら何やらで味付けすればお望み通りの中華「風」にはなると思うが……それ以上は文句言うなよ？

さて、シロカは適当に、と言っていたもの……ピーマンがあったので青椒肉絲チンジャオロースをベースとしてみた。タケノコは省略。それでも同卓者は満足そうに口へと運んでいるので、問題はなかったようだ。

俺が目覚めたときにはなかったが、料理の完成に合わせてベッドルームの方に折りたたみの座卓が置かれ、俺たちはそこで食事を採っている。

「アンタ……料理ばっか上手くなっていくわね。もう浪人やめて、調理人になったら？」

「いや、そうもいかんだろ……」

受験のために居候してるのに、ここで進路を変えたらマズイ。

「ごちそうさま。美味しかったわ」

「それは何よりだよ。お粗末様」

俺も同じように一皿食べ終え、後片付けの前に一服寛ぐ。シロカも、早速スマホをいじり始めた。

「ところでタツマ……コイツなんだけど……」

そう言つて、俺の方に端末を差し出す。

「……ん？」

覗き込んでみれば、そこに映っているのは制服姿の美少女だった。この赤いリボンのセーラー服には、どこかで見覚えがある気がする。壁の方に顔を上げれば、そこには同じものが掛かっていた。つまり、画面のコはシロカのクラスメイトなのだろう。襟までかかる長い髪色は淡く、日本人とは思えない。とはいえ、外国人のような彫りの深さはなく、その造形の整い方は理想を詰め込んだ人形のようなもある。

「可愛い子だな。友達？」

「……知らないならいいわ」

もつと眺めていた気もするが、サッと引き下げられてしまった。

そして再びスツスと液晶をなぞり、同じように差し出してくる。

「こっちの女は？」

「……？」

こちらのコは……うーん……可愛くない、ということはない。ただ、直近で可愛すぎるコを目の当たりにしている、というだけで。ただ、それを差し引いても……どちらかというところと凛々しい、というべきか。その凛々しい眉と力強い眼差しは、スカート

の制服でなければ男と見間違えそうさ。

とはいえ。

「やはり、特に見覚えはないな」

「……そう」

溜息のような相槌。どうやら、覚えてなくてはならない人たちだったのだろう。

「ゴメン……あ、名前を聞いたら思い出すかも」

自分の潜在記憶力に期待してみるも、肝心のシロカが何も期待していない。

「……アイザワに、ルリコよ。覚えてないでしょ？」

「も……申し訳ない……」

俺は、自分の頭を下方修正しなくてはならないようだ。

「で、そのコたちがどうかしたのか？」

知らないものはどうしようもない。大切なのは、これからである。何故、ふたりの顔写真を俺に見せたのか。

「アイザワの方は……いい。覚えてないなら、そのまま忘れてなさい」

「お、おう……？」

といわれても……あの可愛さは忘れようがないよなあ……。おそらく、全校生徒が並ぶ朝礼の壇上からでも、あのコだけは探し当てることができそうな気がする。それ

ほどの存在感だった。

「で、ルリコの方がターゲットよ」

「ターゲット？ 何の？」

関わり合いになれるのであれば、先程のアイザワというコの方が俺としては嬉しい。

などと悠長なことを、考えている場合でもなくなった。

「何って——」

「暗殺の」

……あん……さつ……？

いや……

いやいやいやいや！

「ま、待て！ 暗殺って……！！」

しかし、シロカの視線に揺るぎはない。

「全然わからん！ 何でシロカが。そもそも、その女のコが一体何を……!!？」

シロカは、残念そうに首を振る。

「……はあ、本当に何も覚えていないのね。貴方には失望したわ」
そう言つて、シロカは腰を上げる。

「だったら、せめて私の邪魔はしないで頂戴」

「するに決まつてんだろ！ 幼馴染を殺人犯にしてたまるか！」

何より、主人公として……いや、それ以前に人としてマズイ！

「……話すんじゃないわ」

何やら、ビククリするくらい落胆されてしまった。が、絶対に俺の方が正しい。

「とにかく、俺は人殺しなんて認めないからな」

「じゃあ、殺し以外なら協力してもらえるのね？」

「な、何だよ……？」

というか、殺し以外って、あまりに幅が広すぎる。何を企んでいるのか戦々恐々し
てみるも……その笑みは、俺の反応が面白かっただけらしい。

「安心しなさい。ただの荷運びだから」

「何を運ばせる気だよ!!」

「普通に街に出て買物するだけよ。物騒なものや、物騒じゃないものを、ね」
と、シロカは冗談めかして笑う。どこまで本気かわかったもんじゃないな。

「明後日は早めに出掛けるから、休日だからって遅くまで寝てるんじゃないわよ。八時半に起きて、朝は現地で食べるから、作らなくていいわ」

「……俺が作る前提なのか……」

まあ、いいけど。

「下宿させてやってるんだから、そのくらい役に立ちなさい」

「はいはい。で、そんな朝早くからどこ行くんだよ」

学校が休みの日は、午後まで惰眠を食るのが全世界の共通認識ではなかったか。

「バスで新楽町しんらくちょうに」

「バス……で……え？ どこに……？」

どうにもイメージが浮かばない。

「そういえば貴方、下宿はさせてるけど引きこもり同然の生活してたものね」

「う……面目ない……」

俺を打ちのめしたシロカは、からかうような笑みを浮かべている。

「ま、浪人生は浪人生らしく、引き続き引きこもってればいいわ。余計なことを考えずにね」

「余計も余計な最たることを企んでるのはお前の方だろ！」

女子高生が暗殺とか、どこのライトノベルだよ！

怒り出すかとも思ったが……わりと余裕で受け流しているな。一八〇度回ったか？

「私にとつては余計どころか最重要事項なのよ。だって……」

その表情からは笑みが消えている。真剣なのはわかるのだけど。

「世界を守る、って決めたのだから」

そのセリフは、完全にラノベそのものだった。

さて、これには俺は何も言えず、食器を片付けて、洗い物をして、戻ってきたところでひたすらに赤い本を解き続けている。ちゃぶ台で。床に直座りで。その横でシロカは……パソコンには向かっているが、到底勉強しているようには見えない。何しろ、画面に描かれていくのは……それ、漫画だよな。石造りの家に木製のテーブル……中世ヨーロッパがベースのファンタジーモノってやつか。そこで、一家団欒でパンを食べてる。のんびりした子供が姉と思われる女性にアレコレ世話を焼いてもらっているな。実に楽しげである。

描いている本人も、実に楽しげである。

「……シロカが使ってない間は、俺がそっちに座ってもいいんだよな？」

「何？ 疲れたの？」

チラリと一瞥するが、席を変わってくれる様子はない。

「疲れたのなら、眠りなさい。私も、後ろに視線があると気が散るし」

「寝ろって言われても、どこで……?」

「そういえば俺、床で寝てたんだよな。」

シロカは気怠そうに席を立ち、そのまま部屋の反対側のふすまを開けると、そこには寝具一式が。

「布団くらい自分で敷きなさいよね。床寝が嫌なら」

もちろん、シロカ自身が運び出してくることはない。そのくらいのことは自分でやるさ。ということ、参考書は棚に戻し、筆記具も棚のペン立てへ。そして、ちゃぶ台を畳み、布団をまとめて台所の方へ……

「ナニ考えてんの。布団を油にまみれさせるつもり?」

扉の前でシロカに止められてしまった。言われてみれば、あんなところで寝るべきではないな。しかし他に練れそうな場所といわれても、狭いだけに思いつかない。

「……待て、じゃあ……同じ部屋か!」

それは男女としてマズイだろ!

バサバサつと布団が床に落ちたが、俺はここで寝ることに納得したわけじゃないかな!? あまりの非常識さに呆れただけで……! !

にもかかわらず、シロカは本当にシロカだ。

「へんなことが起きるのなら、とつくに起きてるわよ」

「……………」

それは俺を信用してくれている——と思いたい。その危ういまでの軽装も含めて。

「…………ふ、ヘタレ、と責めるつもりはないわ。貴方は、そういうものなのだから」

「そういうって…………何だよ…………」

シロカだつて決して可愛くないわけでもない。読者が期待するような展開になれば、甘んじて流されてしまうかもしれないというのに。

だが…………言われてみれば、俺から何かしでかすことはなさそうだ。

そして。

「ともあれ、寝るのなら先に寝ておきなさい。心配しなくても、私が貴方にイタズラするようなことはないし」

「へーへー、そーでしょーとも」

ということ、読者の期待にはどうやら応えられそうにない。

「先に寝てもいいけど、起きるのも先にしなさいよ。朝ごはんを作るためにね」

「…………まあ、下宿している身として、そのくらいは…………な」

漫画を描くときってペン先でカリカリいうイメージあったんだけど。完全にパソコン上での作業のようで、小さくコツコツ音が鳴るだけだ。これなら、すぐに眠りへと

落ちることだろう。明日の朝食のことを考える間もなく。

その家族のことを——俺は知らない。

ただ、温かな雰囲気だけは伝わってくる。

朝食を作っている母親。

寝ぼけた弟の身支度を手伝う姉。

窓の外には青々と農作物が実っている。

とても、幸せそうだ。

なのに顔も輪郭もぼやけて——

それは、どこの誰なのか。

何もわからないけれど、

この光景は、俺の中へと染み渡っていく——

ピポツパ、ピポツパ、ジャジャンジャン……♪
な……ん……あぁ……シロカのスマホが鳴ってるのか。外はもう明るい。一晩よく眠れたようだ。

隣の一段高いベッドの上で眠るシロカは……まだ起きてくる様子はない。前奏は既に終わり、男性ヴォーカルによる熱唱が始まっている。

「んー……むー……んー……」

枕元で音楽がガンガン騒いでいるのに、よくモゾモゾしてられるな。寝ぼけた様子で黒い端末を手繰り寄せ、モソツ、モソツと指でなぞることで静かになる。が、そのまま動かない。

これは、まー……俺に朝食を作れと言っていたし、そういうことなのだろう。

「……じゃあ、俺は朝飯作ってくるから、できたら起こしに来ればいいんだよね？」
「んー……」

返事として成立しているかわからんが……ともかく俺は作らねばならない。サッと布団を畳んだところで……さて、献立は……と考えてみるも……ふと、パンを囲んでいる食卓を思い出す。これは、昨日シロカが描いていた漫画の影響か。しかしまあ、構わんだろ。とはいえ、あの世界と違って出来合いの食パンがあるから、それをトースターで温め直して……その間に冷蔵庫を開いてみると、ハムと玉子が目についた。

これに、葉野菜……表の畑から——なんて、窓の外を覗いてみるも、ここは二階だし、そんな土地などありはしない。ということ、再び冷蔵庫を漁ってみれば、まあ、しなびかけたカット野菜が残っていた。水にさらせば少しはシャキットするだろう。

ということ、メニューは決まった。あとは調理するだけ。調味料関係の所在は昨晚一通り扱ってるから問題ない。玉子とハムをサツと火にかけてとところで、トースターの方がチンと鳴った。それを皿に乗せ、焼けたばかりの玉子とハムを載せて……これに野菜を乗せた上でもう一枚のパンでフタ。……よし、完璧だ。

それじゃ、シロカを起こしに行こう。シパッと部屋の引き戸を開けるも、中の様子はまったく変わりなし。

「おらっ、朝飯できたぞ。起きろっ！」

と布団を捲り上げるも、パジャマ姿のシロカは懸命に丸まっている。黒……ではなく、ネイビー、っていうのか、こういうの。というか、寝る前に着るのなら、起きてる間も着ていて欲しかったのだが……。

「ふむう、むう、むむう……」

ゴロリと背を向け起床を拒否。あ……もう、面倒臭エ。これも食事係の仕事のうちか？ よっこいせ、とシロカを担ぎ上げると……う、意外と重い。もつと軽々と持

ち上げられるつもりだったのだが。とはいえ、床へとそつと下ろすだけだ。カーペツトの上に座り、ベッドの側面に寄り掛かるシロカは……再び眠ってしまえそうだ。

その前に、折りたたみ式のちゃぶ台を広げ、俺はふたり分の朝食を運んでくる。

「むー……ふー……ん……」

「ほら、ちゃんと食べえ！」

両手をパンの上まで誘導すると……知らず知らずのうちに食欲が勝つたらしい。ゆつくりと手に持ち……もごもご食べ始めた。

が、そこから先も世話が焼ける。

「おいっ、黄身が垂れてるぞ!!」

慌ててティッシュをパジャマにあてがうが……やれやれ、これは洗濯が面倒だぞ。それでもゆつくりと食べ終えて……

「……すう」

「寝るな！」

あー……ホントに大丈夫かよ、コイツ！ シロカ、これから学校なんだろう？ だったら……と壁を見ると、そこにはあつらえられたように服が一式ハンガーに掛けられていた。セーラーのついた半袖シャツと、爽やかな青いスカート。どうにかして、あれを着せねばならない。だが……うーむ……うーむ……うーむ……？ 様々な考えが過るも、と

りあえずはそのハンガーをシロカのところまで持ってきた。

「くう……みゆう……」

……起きる気がねエ。これは……だが……ぐう。どうせ中身は昨日見てるし！　こういうときって起きてる方が着替えさせるもんだよな、常識的に考えて！

というわけで、クロエのパジャマのボタンを一つひとつ外していく。男に脱がされるのに、まったく反応しない。それだけ俺を信用してくれているというか、寝起きが悪すぎるだけというか。しかし、何というか……背徳感が半端ないぞ。昨日の夜と同じ格好に戻すだけ、と思いつつも……やはり、自分の手で脱がしていくというのはどうにもヤバイ。多分、シロカの無防備さと、肌の温かさがそう感じさせるのだろう。

だからこそ、意識しないよう、上着の方を引っ張り上げて……まあ、うん、見慣れたタンクトップだ。見慣れちゃいけないものだけだ。こうなると、服を着せていく方に安堵感があるな。もう一度両手を上げさせ、腕を包み込むように……袖を通して……よし、健全だ。が、上より下の方が……更にマズいな……ズボンの腰のあたりに指を入れて、ズルズル……と……!!

「!!」

わ、あ、いや、その、まさか……!!　と慌ててみるも、それは俺の失態だった。

緊張のあまり、下着まで一緒に巻き込んでいただけらしい。一瞬、ノーパンで寝たのかと思っただ。紛れもなく、昨日俺の前でうろついていたパンツそのものである。なので、その外側だけ引き下げ、スカートで危うい生地を隠していく。これで……安心だ。

ジャジャジャン、ジャンジャン、ジャジャジャン、ジャンジャンツ!!

うおっ!! 再びスマホが鳴り出したのはわかるが、先ほどとは打って変わって曲調が激しい。もどうやら、こちらが目覚ましの本命のようだ。にもかかわらず、やはりシロカの挙動は鈍い。

「む……うー……うー……うー……うー」

同じような操作で、騒音は止まった。そして今度は、二度寝に向かうことはない。「……ご苦労」

「起きてたのか!?!」

さんざん手を焼かされたことに対する不満より、着替えまで手伝わせて、お前女子としてどーなんだよ!! 起きてたなら自分で……

「半分ほど。いえ、半分未満」

「どうやら、ほとんど眠っていたらしい。」

「普段はこれから食べて身支度して……って感じだから助かるわ」

ふらーっと立ち上がるが、腰のスカートだけはその意思に背く。パンチラどころかパンモロ——いまに始まったことではないので、俺もシロカも焦らない。

「……ちゃんと留めてよね。詰めが甘いわ」

「だったら自分で穿いてくれ」

シロカが出ていったので、俺はようやく自分の食事でありついた。……少し、冷めてる。

そして、食べ終えて一息ついたところで、シロカは戻ってきた。顔も洗って髪も解いて、ようやく人前に出られる姿になったようだ。

そして玄関前に靴を履こうとしたところで、ふと足を止める。

「ああ、ハムエッグサンド、とても美味しかったわ。ご馳走様」
なんと今更な。

しかし、シロカはこれに思いも寄らない一言を付け加える。

「……てことは、思い出したの？」

「何をだ」

「ルリコとか、アイザワのことよ」

あの朝食と何か関係があるのか？

「いや、全然」

これに、シロカはまたしても溜息。ただ、これは彼女自身へと向けられている気がする。

「どうしてこう上手くいかないのかしらね」

「もしかして、あのホットサンドは何か思い出の一品とか……？」

「全然関係ないわよ。気にしないで」

そしてシロカは、トントンと靴へつま先を通す。

「じゃあ、行ってくるけど……くれぐれも、余計なことはしないでね」

「あ、ああ……」

俺は恭しくも玄関で幼馴染を見送っている。扉の外は、空が広い。このアパート、二階の廊下に屋根がないから雲模様もよく見える。今日は雨の心配はなさそうだ。

さて……ひとりになったところで、俺は大急ぎでダイニングへ。ここの窓から外の通りを見下ろすことができる。そこからそっと覗くと、階段を下りたシロカが路上に出て……左折。いまならまだ……間に合う！

昨日見た感じでは、ルリコという女子もシロカと同じ制服を着ていた。間違いな

く、同じ学校の生徒なのだろう。つまり、俺の幼馴染はいま、殺害を目論む対象がやってくるであろう場所へと向かっているのだ。そんなの、放っておけるはずがない。

ことは人命がかかっている。俺は玄関の鍵も掛けずに飛び出し、シロカが歩いていった方向へと追跡を始めた。アイツも別段逃げるわけでも急いでいるわけでもないの——そういえば、むしろ今朝は余裕を持って出れたようだし、わりとゆったりと歩いている。

そういえば、あたりは似たような服を着ている女子生徒が非常に多い。下手したら紛れて見失ってしまいそうだった……案外わかるものだな。それに、学校までかなり近づいたようで、制服の流れもわかりやすくなってきている。あとは、遠目でやんわりと眺めながら、アイツが撃つたり刺したり暴れたりしないかだけ見守っていればいい。こうして、扉の陰や、電柱の陰や、自販機の陰から。

しかし、何故だろう……？ 逆に、俺の方が見守られているような気がするの。

「……もしもし、そのキミ」

ん？ 背後でナンパでもしているらしい。が、見世物でもないだろう。ならば、気づかないフリをするのがマナーというものだ。我関せずと、俺はシロカの尾行を続行する。

だが。



SOREGA kanojo no
**それが
彼女の**

未知なる世界で
どう生き延びる...?

生存戦略!

seizon senryaku

学校が異世界に飛ばされた!?
それでも見知らぬ大地の上で
誰もが遅く生き延びてゆく。
ある者は『力』で、
ある者は『智』で、
ある者は『心』で、
ある者は『愛』で。
そして.....
彼女たちは元の日常に
帰ることができるのだろうか.....!?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

いじめ
られっ子の
処方箋

正義の投与の
行く末は

イジメの起きない
イジメ小説!?

イジメ撲滅運動——
とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。
しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？
そんな疑問に突き当たる。
悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？
そして、運動を取り仕切る
学級委員・雨弓来未の真の目的とは……？
イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。



コミカライズ版 総集編全3巻
各配信サイト様より
好評配信中

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



アストロルリーズ
兄は国を救った王女は国を滅ぼす
 2

アストロルリーズ
兄は指揮官に妹は銃殺刑に

テロリスト 反逆者
 プリンセス 民間人
 担がれる
 そして... アホの子
 掻き乱す問題児!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/>




応援特区 こづこは 子づくり

—略してKKO問題—

老若男女の隔てなく、
ただひたすらに成果主義——
それが、地下研究所における唯一の掟。
だが、研究員番号386——ミハルは
不毛な研究の毎日に嫌気が差していた。
そんな彼女に命じられたのは、
地上を蝕む少子化問題に関する実地調査！
ミハルが向かった先で虐げられていた
金のない (Kanemonai)
キモい (Kimoi)
オッサン (Ossan)
略してKKOを救うためにミハルが見出した
ただひとつの希望とは——

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/dystopia/>



遺伝子操作によって先天的な才を作り出す『ハイクラス』
薬学によって後天的に才を伸ばす『マイト』
ふたつの主義主張は、破壊と暴力を伴い鋸迫り合う。

『マイト』に所属しながらも
薬物を受け付けられない体質の少年・サカタは
『ハイクラス』でも『マイト』でもない
謎の少女と出逢い、そして――

315

—奪われた記憶—

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/lossmem/>

ゲーム会社でつくった
ゲーム

ただシナリオを追ってだけで
ゲームと呼べるのか？
ボタンを連打するだけでゲームなのか？
そもそも、ゲームとは一体何だったのかを
考えるための一作目です。

ゲームって ナンだ？

ゲームセンターで
つくったゲーム

ゲームで勝つことに必要なのは、
有利な戦略を選ぶことか、
有利なゲームを選ぶことか、
有利な相手を選ぶことか——
そもそも、ゲームに勝つとはどういうことかを
考えるための三作目です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>



俺の名はタツマ。浪人生であり、この物語の主人公だ。
いまは勉強塾であるシロカの家に住居している身だが……
こともあろうに、コイツが同級生の暗殺を企ててやがる！
顔見知りを買罪者にするわけにもいかないだろ？
そういうのを止めてやるのは……やっぱ主人公の役目だよな！